

関わる

育む 健康

衛生感覚

第3回：2023年12月9日（土）15～17時

アフリカ熱帯地域に定住したピグミー系狩猟採集民バカ（Baka）の社会では、おとなたちが子どもたちに対して物事を積極的に教える行為はほとんどみられず、模倣しながら経験を積むことが一般的である。こうしたなかで、バカの子どもたちが日々の暮らしや活動を通じて、どのようにまわりの人びとと関わりながら、健康に結びつく衛生感覚を養い、意識しているのだろうか。この発表では、バカの人びとをとりまく生活環境の現状や変容を踏まえて、子どもによる水くみや排泄、調理などの事例を紹介しながら考える。

子どもの日常から探る
衛生感覚：カメルーン熱帯
バカ・ピグミーの事例から

林 耕次
(はやし こうじ)



京都大学アフリカ地域研究資料センター・特任研究員。総合研究大学院大学先端科学研究科博士課程修了、博士（学術）。1998年より、カメルーン東部州、熱帯雨林における定住した狩猟採集民バカの暮らしと生業活動、及び社会変容について研究している。近著として『講座 サニテーション学 第5巻サニテーションのしくみと共創』（共編著）。

子育て

第1回：2023年10月7日（土）15～17時

人類学から考える子育て：子どもの成長はその子がおかれた家族や社会と深く結びついている。人類学は、子どもとそれをとりまく人々のやりとりが時代や地域によってさまざまなかたちをとりうることを示してきた。今回の発表では、南部アフリカのナミビア北中部に住んでいるクン・サンを事例として、こうした可能性について、皆さんと一緒に考えてみたい。具体的には、クン・サンにおける授乳の様式、ジムナスティック（養育者が膝の上で乳児をジャンプさせる一連の行動）の分析について紹介する。



高田 明（たかだ あきら） 京都大学アフリカ地域研究資料センター・教授。主な研究は、アフリカ狩猟採集民。

著書に『狩猟採集社会の子育て論：クン・サンの子どもの社会化と養育行動』（京都大学学術出版会、2022年）、『Hunters among farmers: The !Xun of Ekoka』（University of Namibia Press, 2022年）、『The ecology of playful childhood: The diversity and resilience of caregiver-child interactions among the San of southern Africa』（Palgrave Macmillan, 2020年）等。

京都大学アフリカ地域研究資料センター 公開講座 シリーズ「関わる・育む・健康」

今回のシリーズでは、「関わる・育む・健康」をメインテーマとして、5回連続で公開講座を行います。アフリカにおけるさまざまな人や組織との関わり、それを通じて、子どもや新参者が社会の一員となれるように育てていくこと、さらにはそのなかで目指されている諸個人や社会の健康について、5人の少壮のアフリカニストが自らの研究に基づいて論じます。なおこの公開講座は、科研費基盤（S）「アフリカ狩猟採集民・農牧民のコンタクトゾーンにおける子育ての生態学的未来構築」（2022-2026年度）<<https://www.cci.jambo.africa.kyoto-u.ac.jp/efm/>> の成果の一部です。

第4回：2024年1月13日（土）15～17時

野生動物マネジメント

コンゴ盆地・
カメルーンの熱帯雨林で
野生動物マネジメントを共創する



安岡 宏和（やすおか ひろかず） 京都大学アフリカ地域研究資料センター・准教授。高知県生まれ。

中部アフリカ地域研究、生態人類学を専攻。主な研究対象は、中部アフリカ狩猟採集民（バカ・ピグミー）。著書に『アンチ・ドムス：熱帯雨林のマルチスピーシーズ歴史生態学』（近刊）。

熱帯雨林では家畜飼養ができないため、野生動物が主たるたんぱく源として人びとの健康を支えてきた。ところが、カメルーン東南部では1990年代から森林のゾーニングが施行され、商業伐採が拡大するとともに、地域住民による狩猟や森林資源利用が制限されてきた。このような状況を打破するためには、保全機関と地域住民が協働して関わることでできる資源マネジメントを構築する必要がある。本発表では、そのような目的のもとでおこなってきたプロジェクトを紹介しながら、人間と野生動物の関係について考えてみたい。

第5回：2024年2月3日（土）15～17時 水と衛生

水・衛生と健康：
ザンビア・ルサカの
事例から



原田 英典（はらだ ひでのり） 京都大学アフリカ地域研究資料センター・准教授。専門は環境衛生工学。

フィールドワークによるアジア・アフリカの水・衛生および水環境の研究に従事。現在の主な研究テーマは、都市貧困地域における参加型下痢リスク管理、尿管腐敗槽からの温室効果ガス発生抑制、物質循環解析と流域管理、資源循環型ドライトイレの開発と実践など。SDGs目標6の公式監視メカニズムでもあるWHO/UNICEF JMP およびUN-Water GLAASの諮問委員。

水の利用と汚水の始末（水・衛生）は、生きるうえで必要なことである。こうした私的な側面を持つ水・衛生は、一方では地域社会における公共的な側面も持ち、人びとと水・衛生との関わりは多様である。本発表は、サハラ以南アフリカの水・衛生の現状を概観しつつ、水・衛生と人びととの関わりを考えたい。ザンビア・ルサカ市周縁地域の衛生環境についての調査結果を紹介しつつ、下痢リスクに注目した住民参加型アプローチに基づく水・衛生の試みを事例として、地域の人びとが主体となった水・衛生について考察する。

第2回：2023年11月11日（土）15～17時 死

環境の変化の中で死と向き合う：
南部アフリカ ブッシュマン
(セントラル・カラハリ・サン) の事例から



杉山 由里子（すぎやま ゆりこ） 京都大学アフリカ地域研究資料センター・特任研究員。地域研究、文化人類学を専攻。

ボツワナの人びとに魅せられ、ボツワナ大学大学院アフリカ言語文学学科に入学卒業までしてしまう。2015年よりほとんど毎年ボツワナに渡航しており、親に心配をかけ続けている。そのようにして執筆した論文のひとつが「卑いディスタンス：ブガクウェ・ブッシュマンの死との向き合い方の変遷」（『文化人類学』87号2、2022年）。

大切な人の死—これは私たち誰もが少なからず経験することである。しかし、誰もが心に抱えているその喪失は、日常の中で意識するような題材ではなく、個人的に向き合っていくべきものという諦めが、死を前にした私たちをますます孤立させてきた。ボツワナに生きる狩猟採集民ブッシュマン（セントラル・カラハリ・サン）は、ふとした瞬間に溢れては消える喪失の感情を、繋ぎ合わせ共感し合う。そのような死との向き合い方が、社会変容と共にどのように変化してきたかを考察していく。